

『シリアからの叫び』

2017年05月18日

チュニジアで「ジャスミン革命」が起こり、「アラブの春」と言われる民主化運動が広がり、リビア、エジプトの長期独裁政権が倒れた。シリアでもアサド独裁政権に対する反政府運動が起こった。政府軍と反政府軍の戦闘が始まり、それに、IS（イスラム国）が加わり、状況は混乱した。更に、大国が軍事的にコミットし、解決の見えない泥沼の戦闘状態に陥ってしまった。シリアで内戦が始まってから5年間で、国民の平均寿命が79.5歳から55.7歳に縮まり、推定死者数は47万人、負傷者数は190万人、殺害されたジャーナリストは94人、国外への難民は583万人を超え、その8割が女性と子どもであるという。数の報告はしばしば聞くが、実情はなかなか伝わってこない。

米国の女性ジャーナリストのジャーニン・ディ・ジョヴァンニ氏がシリアに入り、『シリアからの叫び』を著し、一般市民の目線で恐るべき実態を報告している。彼女はボスニアの戦禍の実態を知り、シリアに行きたいと思った。ある外交官から、中東で仕事をしてはいけない、「さもないときみは必ず四六時中怒りに震えることになる」と忠告された。にもかかわらず、シリアに飲み込まれてしまったと言う。

ジョヴァンニ氏は、戦場や難民キャンプに入り込み、無名の人たちを取材し、戦闘、拷問、レイプの実態や、恐怖におびえる人々の実情をつぶさに伝えている。戦火の中で、人々と出会い、ここまで聞き出せるものかと驚くばかりである。「女性の身で」と言うと失礼かも知れないが、女性ならでこそ聞ける、レイプの悲劇を伝えている。イスラム社会では未婚者は処女であることが当然視され、レイプされた女性は結婚できないとされ、自死するケースがある。人妻も離縁させられ、家族を失う場合もある。男性に対するレイプもある。戦争とレイプは切り離せないようだ。いつ死ぬか分からない兵士たちは刹那的な欲望に走るからである。爆弾の着弾音が生活のBGMであるという。その着弾音のする所では死と負傷の地獄絵が広がっている。街の争奪戦で、家屋に押し入り、殺害は日常的に行われ、家族を失う悲しみは絶えることがない。刃物での殺害はアラブならではと思わされる。

「戦争がいかにも野蛮なものか、という極めて基本的なことに立ち返ることになる。つまり、言い出すのは政治家で、戦うのは兵士だということ。そして兵士は人の子であり、その子たちが傷ついているということ。その子たちが殺されているということである。」街に、死を悲しむ叫びと死臭が漂う。拷問の被害者たちは筆舌に尽くしがたい痛みを耐え抜いた訳である。しかし彼らは、一度拷問されたら、もう人間には戻れないと告白している。指の爪を全て剥がれる拷問、男性器に対する拷問など、多様である。体に受けた傷は生涯残り、心に受けたトラウマから解放されることはない。子どもを守ろうとする母親たちの勇氣と忍耐には、ただ敬服する。

ジョヴァンニ氏は、反政府軍だけでなく、政府軍の戦闘作戦も見ている。電気、ガス、水道のインフラがなく、医療器具や薬品もなく、助かる命を落としていく。「死は生活の一部です」と言う。墓地は増えていく一方で、「死者は人を痛めつけませんよ」と言って、埋葬する。彼らは、シリア人同士で殺し合うことが耐え難い悲しみだと言っている。

彼女は、「痛む傷に塩を塗り込むように、塗り込めば塗り込むほど、痛みと苦しみは増していくのに、やめられないのだ。それを見るたびに、涙が頬を伝った」と書いているが、シリアで出会い、別れた人々の叫びを聞いた実感であろう。そして、終章の「戦争は終わらない」で「国家が戦争を造るのか」という問いを投げかけている。